

(1) 教育実習から学んだこと 〈9〉

生徒と心を通じ合う人間関係を

——体育祭への関わりのなかで——

文学部 4年 I.R

教育実習が始まって1週間、私はほとんど毎日体育祭の練習をしていた。担当教科は国語、部活は合唱部だったため、ジャージを着て走り回る日々に戸惑いと明らかな疲労を感じていた。

教育実習生のなかには体育科が3人いて、体育祭の練習の際にもそれぞれ活躍をしていた。私はもともと体育が得意ではないので、少し出遅れたように感じた。

◇体育祭練習の見学者に寄りそう

だからこそ目についたのが見学をしている生徒やつらそうにしている生徒だった。全体練習では学年に関係なく、見学の生徒達が同じ場所で過ごす。体育が好きなのに怪我をして悔しい思いで休んでいる生徒、苦手意識からなんとなくサボタージュしてしまった生徒、練習の影響で体調を崩した生徒、様々な人がいた。

一言でも良いからと、意識的に見学者全員と話をした。車椅子に乗っている生徒もいて、私の担当クラスの生徒だった。私は彼女と共に体育祭に参加したいと思い、運動が苦手でも応援を頑張ろうという気持ちになった。

それから練習の度に見学者と話すようになった。メンバーは日によって変わるが、車椅子に乗るSさんはいつもそこにいた。話す回数が増えるにつれ、応援の時クラスメイトにどう声を掛けようかなどという会話が弾むようになった。

とはいっても、授業時間のほとんどは練習

中の生徒と共に過ごした。私が参加するのは体育の授業ではなく、学年練習や全校練習のため、グラウンドには多くの先生がいた。そのため、担当のクラスにべったり付き添うのではなく、合間を見て全体を回ることができた。

この時も全てのクラスを回るようにした。1年生は明るく、多少やんちゃな面があった。2年生は思春期を思わせる態度で、3年生は落ち着きもあり話しやすかった。

だからどうと深く考えていたのではなく、ただ彼らを知りたい、彼らと関わりたいという気持ちで行動していた。

◇担当クラスの応援で一体感を得る

一番長く関わったのはやはり担当クラスであった。専門的な知識はないが、現役時代は同じ競技を行っていたので、その時に得た知恵など多少アドバイスをした。

しかし、明らかに要領の良い方法を伝えたとしても、生徒たちに採用されるかどうかは別物であるとわかった。担任の先生が、生徒たちにはもうそれぞれのやり方ができているから通じない助言もある、と言っていたことを思い出した。

そこで私は見守るスタンスであえて距離を置くことにした。状況を一番わかっているのは日々練習に励んでいる生徒だと思い、生徒を信じ、託すことにした。

練習期間には生徒同士の喧嘩などもあったが、当日は皆で頑張ろうという空気ができて

いた。前日までとは全然違う緊張感、高揚感が生徒から感じられた。これは肌で感じられるものであり、正直そのパワーの強さに驚いた。

私もクラスカラーの黄色いTシャツを着て、裏方の仕事の合間にクラスを応援した。担任の先生と共にトラックのなかに飛び入り、全校生徒や地域の人が見ていることも忘れ、身振り手振りと大声で応援をした。生徒が応援を喜び、力に変えてくれたので、私の苦手意識からくる、でしゃばることへの恥ずかしさは既に消えていた。

体育祭が終わり、学校が落ち着いたように感じたが、変化はそれだけではなかった。もともと挨拶の盛んな校風のため、廊下ですれ違えば生徒は挨拶をしてくれた。しかし体育祭の後には会話のネタも豊富であり、生徒と私の日常会話の数が増えた。担当学年でなく、名前を聞いたこともない生徒とも、クラスの生徒と同じように接することができた。

担当学年外の3年生の生徒数名からは、私の授業が受けたかったと言われた。教壇実習が始まったばかりで悩んでいた時期なので、その言葉にとっても励まされた。私の授業を見たことがなくても、体育祭の練習での関わりから、そのように思われるのかと感動した。

行事等で直接関わって時間を共有することは、学校空間を共有することに繋がるのだと思った。それは先生や地域の方との関係にも言えることだが、生徒は人生において敏感な時期であり、人から感じるものも大きいので、関わった時間の多さが及ぼす影響も大きい。

最初、疑問に思っていた体育祭の練習は、授業をする際の根底になる人間関係を作る材料だったのだと、後から実感した。

実際、体育祭の時にあまり生徒と関わらないでいた実習生が、3年生の教壇実習の際、生徒とのコミュニケーションに苦戦していた。その実習生は3年生の下駄箱前に立ち、挨拶を交わすところから関係を築き直そうとして

いた。

◇一体感を土台に授業に取り組む

体育祭の後には、学年行事の野外活動があった。これは教科で担当する学年と関わるチャンスであると同時に、安全面からもクラスに密着していたため、クラスとの親睦を深める手助けになった。

体育祭後に全体に見られたような変化は、野外活動後のクラスではより顕著に表れた。2つの行事を終えると多くの生徒から、1年生特有の見知らぬ年上の人や公の場に対する照れが減った。すると授業中の発問に対する発言率が上がった。生徒が心を開き始めていると感じ、私は学年、そしてクラスが自分の居場所であるように感じられた。

そこからの生徒と私の距離が縮まるスピードは倍速であった。私の授業に至らない点があっても、生徒がなんとか理解しようと前のめりになっているのを感じたこともある。

クラスのSさんとは移動中や掃除中など関わるが多かったので、授業についてもよく話をした。数学が好きな彼女は、国語は嫌いだと言っていたが、国語の授業は楽しいと言ってくれた。

最終日にクラスでもらった色紙には、また私の授業を受けたいと書いてくれた生徒が何人もいた。もう私が授業をすることはないけれど、こういう生徒のモチベーションを拾うことが、国語の授業という大きな流れを作り上げるきっかけになるのだと感じた。

私は当初、生徒のことを知りたい、そして私のことを信頼してほしい、と思っていた。でもそれは不十分な人間関係だと気付いた。生徒を知ろうと関わっていくうちに、生徒は私を見て、私を知ろうとしていた。生徒に信頼される前に私がしたことは、生徒を信頼することであった。本当に必要なのは、互いに知り合い、互いに信頼し合うことなのだ。

関係を作るのにはこつこつと時間をかける必要がある。教育実習という短い期間では、関係の形成はまだ途中の段階だ。しかしそのなかで、互いを近づける時間を早めてくれるものが行事である。一緒に努力し、嬉しさや悔しさを共有する経験はその後の絆に繋がる。

ほとんどの生徒が、いつも一見きちんと授業に臨んでいるように見えるが、信頼関係のない先生の授業には心を傾けてはいない。この実習では、生徒と出会っていきなり授業を始めるのではなく、順を追って教壇に上らせてもらったことを感謝している。

体育祭の練習という日常の1コマや行事当日の過ごし方で、生徒の授業に対する意欲が大きく変わるということを体験した。生徒の意欲は、学校における全ての時間が絡み合い、生ずるものだ。教師は繊細に気を配りながら、その1つひとつを上手く結び付ける必要がある。